

## 「特別の教科 道徳」の充実と 都小道研（講話内容要旨）

後藤 忠

### 道徳の混乱

学校で「道徳」の混乱が目立つようになったのは新学習指導要領の告示前後からであった。混乱の原因の一つと思われるのが解説道徳編第 1 章総説（pp2）で述べられた次の文である。

（今回の改正は）・・・「特定の価値観を押し付けたり、主体性をもたず言われるままに行動するよう指導したりすることは、道徳教育が目指す方向の対極にあるものといわなければならない」、「多様な価値観の、時には対立がある場合も含めて、誠実にそれらの価値に向き合い、道徳としての問題を考え続ける姿勢こそ道徳教育で養うべき基本的資質である」との（中教審）答申を踏まえ、発達の段階に応じ、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童が自分自身の問題と捉え、向き合う「考える道徳」、「議論する道徳」への転換を図るものである。

新学習指導要領には、今までに例がない「問題解決的な学習」などの特定の指導方法が具体的に例示され、解説道徳編には道徳授業の特質に馴染まないのではないかとと思われる言葉が並んだ。また、pp3、4 には

道徳教育を通じて、個人が直面する様々な状況の中で、そこにある事象を深く見詰め、自分はどうすべきか、自分に何ができるかを判断し、そのことを実行する手立てを考え、実践できるようにしていくなどの改善が必要と考えられる。

と、わざわざ「道徳教育を通じて」と書いてあるにもかかわらず、不注意にも「これからの道徳授業にはこうした指導を取り入れなければならない」という誤解が広がったためと考えられる。

その頃からだった、道徳教育に造詣の深いと言われている著名人方たちが教育委員会や道徳の研究団体から招かれ、掌を返したように「今までの道徳は時代遅れの道徳だ」と決めつけ、これからは「問題解決的な学習や道徳的行為に関する学習、考える道徳、議論する道徳が授業の主流になる」といった、いわゆる「新しい道徳」を煽る動きが活発化していった。その煽りに乗せられて、道徳の特質や目標を無視したデタラメな授業があちこちの研究会や学校で、特に若い教師の間で目立つようになっていった。

時期を同じくして、某教育委員会が大きな予算をかけて作成し、全小中学校の教員に 1 冊ずつ配ったあの劣悪な啓発資料が道徳の混乱に一層拍車をかける結果になった。

そうした渦中であって、今まで道徳授業に地道に取り組んできた教師たちからは「これからは今までとは違う道徳になるのか？」といった不安や戸惑いの声が多く聞かれるようになった。

### 「これまでの道徳」についての理解と評価

「道徳教育の充実に関する懇談会」、「中教審道徳教育専門部会」、「学習指導要領改善協力者会議」の責任者、専門家、メンバーたちは「これまでの道徳」についてどう理解し、どう評価したのだろうか？

「60年間も『道徳』の時間の指導を続けてきたが一向に成果が挙がっていないのは、指導方法に実効性がなかったからだ」と理解し、判断したのだろうか？「今までの指導法はすでに劣化し、形骸化し、硬直化し、機能不全に陥っている時代遅れの指導法になっている」と評価したのだろうか？

いや、それは違う！

「道徳」の成果が挙がっていないのは、多くの学校が道徳教育を忌避し、「道徳」の時間の指導に本気で取り組んでこなかったからであり、指導の工夫・改善を怠ってきたからに他ならない。

そんなことは学校関係者なら誰だってよく知っている明白な事実である。こうした歴然たる事実をきちんと認めた上で、「新しい道徳」を啓発しているのだろうか？

もし、そうでないとしたならば、まことに恣意的で無責任極まりない啓発と言わなければならない。

また、長年に渡って道徳教育を平然と忌避し続けてきた校長や教員に対して、唯々諾々とた形ばかりのずさんな指導を繰り返してきた各教育委員会の責任は極めて重いとと言える。

そんな教育委員会や学校に限って、**特別の教科 道徳**の誕生に浮き足立ち、耳新しいだけで胡散臭い中味の指導法に飛び付き、「評価はどうする、評価はどう書く」と右往左往していたではないか。

そんな主体性のないことでは、これからの道徳科の実効性などほとんど期待ができない。

一方、「道徳」の時間の指導をちゃんとやってきたと言う人にも責任がある。児童に学び、学んだことを授業改善に生かすという真摯な探究心を忘れ、退屈で、気合の感じられないつまらない授業を繰り返し、あるいは間違いだらけの教師用指導書をただなぞるだけの手抜き授業を続けてきた結果、道徳の魅力を他の教師に伝えられなかった責任は非常に大きいと言える。

いずれにしても、道徳授業の魅力は授業者が児童への愛を込めて行う授業の、児童が学ぶ姿で伝えなければ他の人には伝わらない。

## 道徳科充実の課題

小学校で「道徳科」が全面実施されて6年が経つが、最近ではすっかり道徳熱が冷めてしまった。(道徳熱と言っても単なる評価熱だったが…)

しかし、道徳科を「にわか熱」で終わらせるわけにはいかない。仏を作ったら魂を入れなければならない。

今後、特に期待したいのは校長の**本気度**である。

児童の人格形成の中核を担う道徳教育は学校の教育経営の柱であり、その充実には校長の力強い教育ビジョンの提示が欠かせない。校長が掲げるビジョンに向かい、校長の指導の下に全教職員が一丸となって取り組むところに道徳教育の成果は顕れる。

したがって校長は、「私は道徳がよく分からないので、(道徳教育推進教師に)君、よろしく頼む」ではもうだめなのである。

校長が本気になれば、教職員も本気になり、道徳教育の成果は大いに期待できる。

繰り返すが、「道徳」の時間の位置づけが、新たな枠組みによって「特別の教科 道徳」に変

更されたが、道徳の学習の特質や目標、つまり道徳の授業で児童は「道徳的価値の自覚を深める学習を行う」という本質が変更された訳ではない。このことをもっと強く意識しなければならない。

## 各学級担任は自分で考えて道徳授業を行え！

教師用指導書や赤刷り本丸なぞりの授業は百害あって一利なしである。

笑えない話がある。教師用指導書通りに発問して、そこに書いてある「予想される児童の反応」通りに児童から答えが返ってこなかったら、「今日の授業は失敗だった」と自己評価する教師がいるという。どこの誰が書いたか分からない展開例を「教師用指導書に書いてあるから」と鵜呑みにし、自信を失っている。何とも複雑な気持ちになる話である。

それにしても、教師用指導書や赤刷り本に載っている学習指導展開例の酷さは啞然を通り越して、愕然とさせられる。一体誰が書いたのか、書いた人の名前をきちんと明記すべきである。本当に情けないことだが、ほとんどの教師は「教師用指導書に間違った指導例が載っているはずがない」と信じて疑っていない。高価な教師用指導書がかえって正常な道徳授業の普及を妨げているという実態を断じて許してはならない。(もっとも、教科書の教材にも変な教材が幾つも載っているが…。)

いずれにしても、教師は自分で考えて授業をしないと児童の道徳性は育たない。そのためには本気で勉強するしかないが、教師の仕事は日々多岐にわたり、その一つ一つは実に重い。週1時間の「道徳」にばかり時間を割くわけにはいかない。

したがって、最低年1回でいい、一人一人が徹底的に教材研究を行い、自分で学習指導過程を考え、道徳授業を行う機会を設けることが必要である。**道徳授業地区公開講座**がその絶好の機会だと思う。年に1回徹底的に教材研究を行うことを5年続ければ、相当力が付く。10年続ければ足腰のしっかりしたブレない道徳授業ができるようになる。年に一回、「**基礎を磨いて、理解を深める**」ことを繰り返せば必ず上達する。

また、公開講座で行う授業が同学年同一教材であってもいいが、導入から終末までどの学級も学習指導過程が全く同じというのは不自然である。なぜなら、児童の実態が違う、教師のキャリアが違う、教師の個性や指導観が異なる。本時のねらいに迫る中心発問は同じであっても、それ以外の指導過程が全く同じということはほぼあり得ないことで、誰か考えていない人がいる証拠である。いずれにしても、自分で考えて授業をしないと指導力は向上しない。

## 都小道研に期待すること

教員が組織する研究団体には公的な団体と私的な団体とがあるが、都小道研は公的な団体であるので、研究開発の役割と併せて、人材育成や道徳の普及・啓発といった役割もある。

「特別の教科 道徳」の誕生に伴い、それまであまり注目されることのなかった「道徳」に多くの教師の関心が集まり、どこの研究会も会員数が大幅に増えた。新入会員の中には道徳教育に魅せられ、今も熱心に研究を続けている人はいるが、その多くは潮が引くように研究会から去って行ってしまった。その原因が、単に個々の教師の志の低さだけにあったとは思えない。

多くの研究会は、新入会員のニーズや実態の把握を怠り、手を打たなかったところに落ち度があったと思う。つまり、「道徳のイロハをイから学びたい」と入ってきた教師がたくさんいた

という実態である。

しかし、多くの研究会は**学習指導要領**に新登場した聞き慣れない言葉に異常に反応し、不易であるはずの**道徳科**の特質や**道徳教育**の**基本**の確認を怠ったまま、目先の指導方法の開発競争に突っ走ってしまったことが最大の原因であったと思う。つまり、「道徳科の授業は何を育てるために行う授業なのか」、「道徳科が目指すものは何か」といった根本課題の確認を置き去りにしたまま研究活動を行った結果がこういう事態を招いた原因であると私は認識している。

各研究会の議論では、21世紀型道徳授業とか、創造的・汎用的思考、インテグレイティブ・シンキング、マッピング、合意形成、ファシリテーター、モラル・スキルトレーニング、アサーショントレーニングなど舌を噛みそうな横文字が飛び交い、「そんなことをして果たして児童の道徳性は育つのか？」と疑わしくなるようなお喋りがいつも続くものだから、イロハのイを求めて入ってきた人には何の意味も分からず、「道徳は難しくて私にはとても無理だ」と研究から離れていったというのが実態ではないだろうか。(一方その頃、ベテランの教師たちからも「しばらく道徳の研究から離れます」といった悲痛な声が聞かれたものである。)

もとより私は、研究会が新しい指導法の開発を行うことに異を唱える者ではない。指導法の研究開発こそ研究者の使命であることは言うまでもない。

私が言いたいのは、教育研究は手段(方法)より目的(ねらい)を優先して取り組まなければならないということである。「何を育てるためにその指導法を用いるのか」、「どんな指導効果を期待してその指導方法を取り入れるのか」といった指導意図や指導観を第一にした研究、本末を顛倒しない研究が大事だと言っているのである。

都小道研には、若手からベテランまで様々なキャリアの教師がいる。全員に共通していることは、毎週道徳の授業を行っている、あるいは行っていたということである。机上の空論だけという人は1人もいない。

よい道徳授業というものは、児童と教師と教材とが三つ巴になって響き合うところに展開し、指導の実効性が発揮される。それは指導が巧みだとか、授業が上手だなどとは関係のないものだと私は思う。「上手な授業即よい授業」とは限らず、「下手な授業即悪い授業」とは限らない。経験の浅い教師がベテランも目を見張るようなすごい授業をした例を私はたくさん知っている。

だから、若者とベテランとかの区別なく、授業者は各キャリアに応じた指導観をもって授業に臨み、その授業で見せる児童の姿に道徳授業の真理(真髓)を見つけていく、いわゆる帰納法的な研究手法が都小道研の研究には向いているのではないかと思う。

このようにして見つけたよい授業に共通する要件を分析・整理し、今度はそれを演繹的な手法を用いて授業で実証してみるという研究が都小道研には合っていると思う。つまり、**「児童の姿で授業を語る」、「研究の中心には常に児童がいる」**そういう研究である。これならば誰もが同じ土俵で研究活動を行うことができると思う。

流行りの言葉を実証するために行う児童不在の研究は都小道研の研究には馴染まないと思う。そここのところをみんなをよく考え、確認し合ってもらいたい。

さて、**都小道研の外に目を転ずれば**、今、特別支援教育における道徳授業のニーズが高まっている。道徳科が誕生してから特別支援学級の**教育課程編成**に道徳科を組み込む学校が大変増えた。しかし、その授業はまだ緒に付いたばかりの手探りの状態である。

また、通常学級に在籍する児童で個別の配慮が必要な児童への手立てはまだ手つかずで、放ったらかしの状態である。今、最も必要とされるのは特別支援教育における道徳授業の研究開発ではないだろうか。

**その一方**、かつて道徳不毛地帯と言われていた多摩地区において、必死に道徳を守り、孤軍奮闘していた教師たちに「多摩に光を！」と注いだ都小道研の研究支援は、長年にわたる弛まぬ努力によって、今や「多摩から光を！」の時代を迎えていると言っても過言ではない。多摩地区の多くの学校で非常に質の高い授業が展開されている。

こうした実態を踏まえ、関係する方々ともよく相談して、都小道研の組織再編について検討してもよい時期に来ているのかもしれない。

道徳科の充実とともに、都小道研がますます発展することを心から希望して止まない。